

笑いの文化

山 本 吉 信

ひとびとの口からギャグがこぼれ、巷に笑いが溢れ、むしろその過剰が気になる今の社会は、笑いなき一時期の暗さを知っている者には、その明るさを歓迎しなければならぬ。楽しいから笑うのだから。だが、笑うから楽しいという一面があって、笑いの過剰には、現実から目をそらすための、どこかわざとらしさがあって、手放しに喜べないのかもしれない。人はまた、おかしいから笑う。おかしさとは何か。弱肉強食とすべきところを焼肉定食と書いたり、パイを顔にぶつけたり、「じゅげむ、じゅげむ」と長い名を付けたり、「ぞうさん、ぞうさん、お鼻が長いね、そういうお前も鼻べちゃね」と歌うとき、おかしいのである。世の常識として言動に期待される当り前の基準のようなものがあって、それから外れるとき、おかしさが生れるのではないか。葬式に振袖姿でゆくことは常識はずれとして、滑稽を通り越して、むしろ笑い者になる。型どおりを守る真面目さは、その逸脱としての笑いや、しゃれを笑い者として拒否する。だが、それからの逸脱、それ、ずれの方に人間的なものともしさが見られるとき、常識の真面目さが、むしろこっけいとなる。制服に身を固めて、足高く行進するロボットのような言動そのものが、チャップリンの举措のようにおかしく、笑いを誘うことになる。「本日はお日柄もよろしくて」というようなモーニング姿の紋切り型の真面目さの、非人間的な嘘が笑われるのかもしれない。

風刺の笑いなのである。ずれ、それとしての笑いを許容する自由こそ、社会の健康さのバロメーターとしなければならない。年一回だけの「千葉笑い」を必要とするような暗さは過去だけのものとしたというわけである。だが、言葉の語呂合せだけの駄じゃれには、そのようなアイロニーはない。駄じゃれやドタバタ劇の過剰は、ごまかし笑いとして頹廢の兆しではないか。哺乳類は毒を持たない、唯一の例外はハリモグラだという動物学者の高説に、「もう一つ、人間が」と言うような知的なユーモアが、もっと歓迎されなければならぬであろう。別の、人間的眞実に気付かせる自由で、柔軟なエスプリが、何よりも貴重と思えるからである。